

## 追

## 憶

近 重 眞 澄

私が熊本に居たのは僅に二年半に過ぎない。併し是が一本立ちになつて世間へ乗り出した第一歩であつた爲め、畏しく長かつた様な氣もするし、又事々物々に人生の小意地あるさを痛感して、將來の防備を嚴重にせねばならぬと思はされたことを思ひ出だすのである。授業に關したことは生徒が度々試験してくれと熱心に乞ふので、自分に成績しらべの面倒はあるが、生徒の爲めには良い事だと思つて試験をすると何うです、生徒は化學の試験が有るから英語は休んで下さいとか、國語は止めて下さいとか云つて他の先生を無視した行動をする。併し迂闊な私は何にも知らずに居ると、教頭櫻井教授から呼出されて大なるお叱を受けた。其時の「モーラル」として私の胸中に「世ノ中ハ善イ事ヲシテモ必ズシモ善果ノ來ルモノデハナイ」といふ様なものが出来上つた。同僚間の出来事としては自分から別に求むる所もないから、人様にも淡如として振舞つて居ると、或夜酒氣を帯びた某氏が怒鳴り込んで、貴公は人の首を眞綿でしめるやうなことをすると云ふ、それから他人には益々さはらぬ神に崇りなしを極めて仕舞つた。さて自分は一生懸命に立はたらいて月給も少しは昇進するし、先づく是れで一人前の先生だ位に思つて居ると、意外な衝動をうけた。それは生ま若い弱輩では熊本地方に於ける「コジレ」切つたる地方人の目には何と映つるか、小生の家の前で、こゝには近頃御主人は他行中と見え、書生さんが留守居をして居ると云ふ噂をして居たのであつた。

世の中に出て其の世の中に甘まいことは少いと其頃に感得して、其先入が今日まで主となつた私は、どうしても一人前の活潤性を發揮し得ないのも或は自然の歸結であつたでせう。

熊本に居た頃、藩の武藝である眞途流棒術を習ひました。是は京都へ來てからも漸らくは續けて居ましたが、家が變つ

て坪が無くなつてから、自然に止まりました。今棒を振つて見ても体力が衰へて物になりませぬ。盛んな頃、夜街路に出て一揮すると前を行く人が腰をぬかした事もありました。

大正十四年の春、丁度三十年目に熊本を訪ひました時に、

逐浪隨波了夙縁。功成事敗只聽天。盧生一夢任頭感。自別青山三十年。

とやつて見たが、筆端梗塞して、まだ眞の胸中を詠じ盡して居ませぬ。今日の私はもう世間には何の執著も持つて居ません、

秋雨を淋しがる我にまた生命あり

といふ位の氣分は残つて居ます。

## 三十九年前の回顧

山 田 準

自分が五高教授に就任したのは三十九年前即ち明治三十二年の九月で三十三歳の時であつた。其時漢文の長尾愼太郎教授が東京へ榮轉したので兒島獻吉郎教授が代つて主任となり、自分が其缺位を充たしたのである。始めて九州の地を踏み五高に到着して其の雄大なのに驚いた。

初めに中川校長に面會したが、循々と話される態度は謂はゆる老婆親切であつた。次に櫻井幹事に面會したが、これは嚴肅の態度に打たれた。松本教頭の瀟洒と夏目（漱石）教授の簡素とは善き對照であつた。翌年夏目教授が教頭になつたが、その態度は嚴肅其物であつた。誰も後日の文豪を豫想するものは無かつたであらう。

獨逸語に上田、藤井、青木、小島の四教授が揃つて居た。漢文とは妙に意氣投合の姿で往來が繁げかつた。神谷工學士